

**地域情報（県別）****【香川】「故郷の医療を守りたい」地方指導医がユニークな研修を行う理由-藤川達也・三豊総合病院内科部長に聞く ◆Vol.3**

2020年10月2日 (金)配信 m3.com地域版

「英語論文執筆の指導」「国際学会での発表」「著名医師によるセミナー」という3本柱を三豊総合病院（観音寺市）の研修に加えた内科部長の藤川達也氏。研修医からはこうした活動に好意的な声が聞かれ、研修医の増加にも「少しは貢献できたのでは」と藤川氏は手応えを語る。モチベーションの源泉は「地元の医療を守りたい」思い。オンライン講習の実施や指導医への門戸拡大など展望は広がる。（2020年7月28日にインタビュー、計3回連載の3回目）

▼第1回はこちら

▼第2回はこちら

**——先生が研修医に行っている英語論文の執筆指導。念のための確認ですが、これは希望者にのみ行っているのですよね？**

そうです。学生への説明会などでは常に言っていることですが、この活動は希望する人に対して行っているもので、こちらから無理に勧めてはいませんし、また参加しないからといって評価に影響するものではありません。研修医に最も力を入れてもらいたいのはあくまでも当直を含めた日常診療なので、興味と余力のある人だけを対象としています。英語の読み書きや論文執筆が苦手な人に不要な不安を与えたくないで、こちらとしてはよく気を付けていますね。



内科部長の藤川達也氏（藤川氏提供）

**——英語論文を書き上げたり、国際学会で発表したりした研修医からは過去にどんな感想が聞かれましたか。**

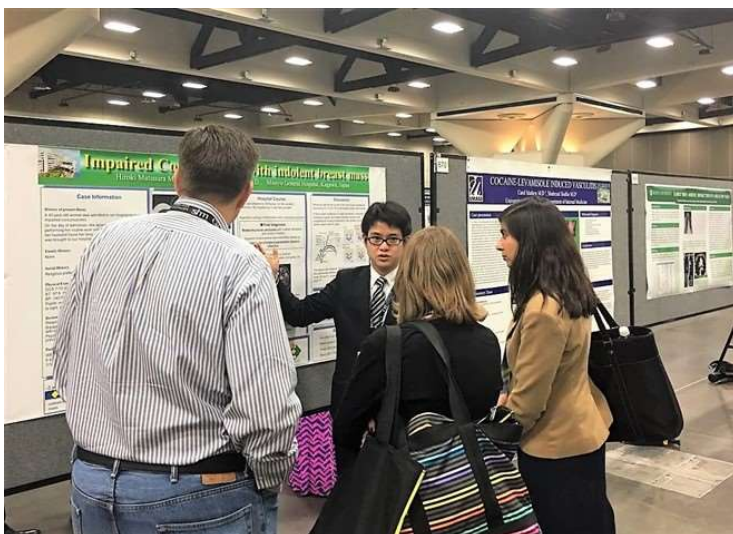
英語論文に関しては先ほど話した通り書き上げる人は限られますが、それでもアクセプトされたときにはそれなりに喜んでくれますし、他の指導医から「ファーストオーサーになったのはすごいね」と評価の声を聞いたときにはうれしそうな反応を示してくれます。

また、国際学会への参加と発表は華やかさもあってか、「研修生活で最も思い出に残ったこと」として挙げてくれた研修医が複数いました。論文書きはどうしても地味な作業になりがちですし、「憧れの海外に触れられる」という意味でもやはり国際学会への参加の方が印象に残りやすいのかもしれません。

**——二つの活動により、若いうちから英語に慣れ、世界的な舞台の一端を知れるのはいいことだろうと思いました。**

研修医にそう思ってもらえたらうれしいです。「英語論文を書く」ということは必然的に英語を読む力の向上も望めますし、英語を読めるというのはつまり、世界的な医療の最新情報を自ら得られるということなので、医師としてのスキルアップに役立つでしょう。私自身、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が起きてからその必要性を一層、肌身に感じました。

一方の「英語が書けて話せる」ことは多くの医師にとって必要性がそう高くないと思いますが、例えばサブスペシャリティ領域での第一人者を狙って症例をまとめたり臨床研究をしたりする場合、遅かれ早かれ英語で論文を書いたり海外で発表したりする機会は訪れます。そんな展望を描いている人であれば当院の研修はある程度有効だと思いますし、またそこまでではなくても、現実的に国際学会に一度でも足を運んでおけば、「次からは一人でも参加できるかもしれない」などと思え、国際社会への心理的な抵抗感が減るのではないのでしょうか。



国際学会「SHM」で来場者に英語で症例を発表する研修医（藤川氏提供）

——病院全体への影響はどうでしょう。何かポジティブな変化があったのであればお聞きしたいです。

病院の知名度が上がり、大学病院などから短期研修の依頼が増えたことは一つの成果だと思います。アカデミックな研修を行っている地方の総合病院は全国的に珍しいので、「三豊は面白いことをやっているぞ」などと近隣病院の、特に指導医の先生方に評判が広まり、自院の研修医に当院を紹介してくれるようになりました。

それと、私の活動の影響度は小さいと思うのですが、実際に入職してくれる初期研修医の数も増えました。私が指導員を務める前は2、3人でしたが、それが4人、6人と増え、2017年と2018年は連続で8人とフルマッチを達成。専門医制度の影響なのか実力不足なのかここ2年は4人、3人と減ってしまいましたが、研修医に入職理由を聞いたところ、「先輩の勧め」「雰囲気良さそう」「実技実習が充実」などの後に「アカデミックなこともしているから」と言ってくれる人もいたので、少しは研修医の獲得に貢献できているかもしれません。

——先生はこうした活動の報告をSNSに投稿し、また外部講師の人選や連絡、謝礼などの相談も自ら行っているそうですね。なぜここまでやるのでしょうか。言ってしまうと、英語論文の指導をはじめ三つの活動は指導医の仕事としては必須ではないと思います。

私自身がやっていて楽しいとか、学術的にも医療に貢献する医師に育ってほしいとかいろいろありますが、やっぱり一番は香川県が私の地元だからです。ちょっと利己的に思われるかもしれませんが、家族や親族、ひいては自分の地元で生きる人たちを守るためにも、地域医療の縮小は食い止めたい。当院を含めて地方の医療機関は専門医が減っている傾向にありますから、どうにかして若い医師をここに呼び込み、地域医療を存続させたい思いが強くなります。それが結果的にこうした活動の展開に結び付いています。

——なるほど、腑に落ちました。最後に、指導医としての今後の展望をお聞かせください。

COVID-19により、残念ながら国際学会の参加と発表は当分の間できなくなるでしょう。外部講師によるセミナーも同様ですが、ただこれに関しては「オンライン講習」という形で代替できるだろうと考えていて、オンラインだとむしろ人選の幅が広がり、さらに経費が減るのでより頻繁に実施できる可能性もあります。総じて、研修の在り方をブラッシュアップできる好機と捉えたいです。

それと、英語論文執筆の指導に関しては対象を研修医に限定せず、指導医にも広げたいと考えています。アカデミックな活動に興味があるのは学生よりも研修医、研修医よりも指導医だと私は考えているので、教える側の医師も来てくれるとうれしいですね。そして、当院で学んだことを拠点の病院に持ち帰り、そこで研修医などに教えていただければ医療界への貢献度も高まるのではないのでしょうか。

当院の研修の詳細は専用サイト「三豊総合病院 卒後臨床研修センター」で確認できます。お問い合わせは医局支援室（Tel:0875・52・3366、Email:[residency@mitoyo-hosp.jp](mailto:residency@mitoyo-hosp.jp)）まで。また、私が研修医に教えているクリニカル

イメージ論文の書き方については過去に医学生・研修医向けのメディア「Cadetto.jp」に掲載していただいたので、要登録にはなりますが興味のある方は参考にしてください。

◆藤川 達也（ふじかわ・たつや）氏

1998年岡山大学医学部卒。同大大学院を修了後、米国ハーバード大学医学部の教育病院ベス・イスラエル・デューコネス・メディカルセンターで2年間、基礎研究に従事。帰国後、備前病院や清恵会病院などを経て、2012年に三豊総合病院に勤務。2014年から指導医を担当。同院内科部長。日本内科学会総合内科専門医、日本消化器病学会消化器病専門医、日本糖尿病学会糖尿病専門医、日本病院総合診療医学会専門医、日本内科学会指導医。

【取材・文＝医療ライター庄部勇太】

記事検索

ニュース・医療維新を検索

